



青龍祭の夜

作:近藤せいけん



清太郎は、初めて清川村に入った。小田急線本厚木駅で降り、神奈中バスに揺られ、小鮎川沿いに上ること40分。静かな山間のバス停『清川村役場前』で降りた。絹子が出迎えに来ていた。

南 清太郎32才。東京の表参道で、若者に人気のあるブティックを経営している。

絹子=熊坂 絹子は、清川村の役場前を下ったところにある小鮎川沿いの古民家で、服装のデザイン、製作をしている。

絹子の家は、江戸の時代から続く旧家である。この清川は面積の93%が山林で、江戸時代から林業が盛んであったが、外国からの安い輸入材に押され衰退した。最近では山間を活用した、お茶作りが盛んになった。清川の澄んだ空気、丹沢が育んだ水が人気をよび、清川茶として名産品となっている。絹子の家も、母が自分の山でお茶作りをし、生計を立てている。

二人の出会いは、絹子が作品を出品した東京の展示会である。絹子の作品に目が止まり、コーナーに立ち寄り話し込んだのが始まり。それは、絹子のデザインが彼の求めていたイメージ通りだったからだ。彼女のデザインは、清川の豊かな自然をテーマに、川、山、湖、浮かぶ雲、そこに生きる植物、動物を描いている。その時以来、彼女のざん新で豊かな才能を世に出そうと、秘かに決めていた。

清太郎は、絹子の工房を訪ねるのを心待ちにしていた。絹子から「八月の上旬、青龍祭と言う二匹の龍が会うお祭りがあるんですよ。よかったら一度見に来ませんか？」と誘われ、来たのだった。

古民家は道路から一段下がった所にあり、北側には小鮎川が、西側には谷太郎川が流れ、川の流れる音に囲まれ、心やすまる空間となっている。「ここは静かな所だね、空気がうまい。澄ん

でいる。」二人は谷合の木もれ日の光を浴びながら、並んで歩いた。古民家の赤色のトタン屋根が見えてきた。本道から坂道を下りていった。坂道の中程辺りから水音が近づいてきた。「ここまで来ると、谷太郎川を下る水音がするんですよ。」「うん、いい音だ。都会では味わえない、心に沁み渡る音だ。」「さあ、どうぞ、工房にご案内致します。」清太郎を工房に導いた。

明治時代に建築された母屋は、どっしりとした落ち着いたたたずまいをしており、一抱えもある黒光りする柱、太いむき出しの梁、古いガラス戸…。どれをとっても、歴史の重みを感じる創りであった。そして高い天井、広い空間。仕事部屋としては理想的だと、清太郎は思った。「この仕事部屋の北側に小鮎川が流れていて、時々大きな青サギが、魚を食べにやってくるんですよ。」と話ながら、大きなガラス窓を開けた。川面を渡る涼やかな風が通り抜けた。「ここは夏でも涼しいんですよ。クーラを点けた事がないの。」「本当だね、午後3時過ぎの一番暑い時間帯なのに、とても涼しい。真夏とは思えないね。」

絹子と清太郎は椅子に腰かけ、仕事の打ち合わせをした。「このデザインはなかなかいい。独創性があって、しかもざん新だ。このアジサイの白と紫の色、配置、よく出来ていますね。」「このアジサイの花の色が、なかなか出せなくて、苦労しましたわ。」「こちらのかっぱの絵、面白い。可愛くて、しかも個性的だ。こちらにも、かっぱ伝説があるのですか?」「ええ、民話ですけど。」と話しながら、絹子は立ち上がって数枚の絵を持ってきた。「『大山の天狗さま』と言う民話からとった絵柄です。」と大きな額に入った絵を見せた。「これはまた迫力のある絵ですね。天狗さまが飛び出して来そうだ。」「この大山の天狗さまの絵は、Tシャツのデザインに使おうと思っていますのよ。」更にもう一枚の絵柄を見せた。「これは今晚お連れする、青龍祭の二頭の龍を描いています。こちらが雌龍こっちが雄龍です。なかなか顔を描くのが難しく、まだ未完成ですの。ほほほ。

この二頭の龍は、その昔、煤ヶ谷村(スガヤム)を流れる小鮎川の天王めいと寺鐘(テラガネ)の深い淵に住んでいて、日照りの時は雨を降らせ、村人を助けていましたの。やがて二頭は結婚するのだけど、青龍祭はその結婚を火を焚いてお祝いする、とても縁起の良いお祭りなのです。」「へ～、縁結びの龍なんだ。」「ええ。」

仕事の打合せが一段落した頃、太鼓の音が聞こえてきた。「あ、青龍太鼓だわ。もう、こんな時間。お食事に行きましょう。ここから車で20分位走った所に、新しく出来た『宮ヶ瀬湖』という美しい湖があります。その湖畔に、美味しいお蕎麦を食べさせてくれるお店があります。そこにお連れ致しますわ。」二人は絹子の運転で、宮ヶ瀬湖へと向かった。

大きな急の坂道を何回も登ると、山間に大きな湖が見えて来た。湖の水面がキラキラ輝き、深い青色の水をたたえていた。道路脇の展望公園の駐車場に入り、湖面をゆっくりと眺めた。「何て大きく深い湖なのだ。美しい。山の湖。静かで幻想的。言葉もない…。」

しばらくすると、民芸風の食堂が現われ、絹子はそこに入った。
(つづく)

名物皿そば、手打ちそば、山登と、染め抜かれた、のれんをくぐると、自然を生かした和風の庭があり、その先に入口があった。

店内は落ち着いた、木目調になっており、厚い年代物の木肌が鈍い光りを放っているテーブルに、二人は座った。

「皿そばを二人枚下さい」「ここの皿そばは、名物なんですよ」

微笑みながら、絹子は話した。

「ここえ、よく、来るんですか」

「ええ、母とよく来るんです」「母が大変、ここのお蕎麦が好きなものですから」しばらくすると、皿そばが運ばれてきた。

細麺の手打ち蕎麦が、五枚の皿に盛られ、そばつゆ、薬味としてわさび、おろしダイコン、細切りの葱が竹を輪切りにした筒に盛られ、小さい椀に、摩り下ろした山芋、うずらの卵がおぼんに乗って出てきた。

「さあ、食べましょう、とても美味しそう」

「いただきます」清太郎はそばつゆにわさびを、少し溶かし、ねぎ、ダイコおろしをいれ、そばをからませ、スルスルと口に運んだ。そして次は摩り下ろした山芋、うずらの卵を入れ、そばをからませ食べた。

「うまい、これぞ日本蕎麦だ」「シンプルにしてベスト」「こんな山奥でこんなにうまい蕎麦に出会えるとは、ラッキー」

「オ、ホ、ホ、ホ、気に入ってもらって良かったわ」

「やはり、水がいいんだろうね」

「清川は水、源流の里と言われていますからね」

「もう少し、食べたいな」

「すみません～あと二枚、お願いいたします」「はい～喜んで」

二人は湖畔の日本蕎麦屋で楽しい時を過ごした。

「ここから、少し行くと、虹の大橋と呼ばれている、橋があります。」

そこから先は、隣町の津久井町に入ります」

「そこに、虹の大橋、宮ヶ瀬湖、山並みを見渡せる、景勝地があります。」

「そこから眺める、風景は、それは、それは、美しい。いつまでも見ていたい風景です」

「へ～え ぜひ見たい。連れて行って下さい」

二人は店を出て、津久井町の鳥屋（とや）の津久井馬術場の近くの、虹の大橋、宮ヶ瀬湖、を見渡せる場所を目指した。

現地が見えて来た。以前からやっていた、温泉旅館を改造して、老人向けの宿泊施設が建築中であった。現場の責任者に断り、その小高い岡の庭に登らせてもらった。

「わあ～すばらしい、風景だ。ここから見る、虹の大橋、宮ヶ瀬湖、山並みは、絶景だ」

「私もこの風景が好きです」

「本当だね、やはり、その場所に来ないと、解らないものだね」

「それに、ここからもう少し入ると、美味しい、隠れた、知る人ぞ知る、まぼろしの、お饅頭があります」「へ～え、いろいろあるんだねえ」

「たみ子おばあさんの、酒まんじゅうと呼ばれています」

「但し、今日は食べられません」「ええ、どうして？」

「ほ、ほ、ほ、ほ、注文生産なんです。事前に電話で申し込んだ人だけ、なんです」「だから、まぼろしの酒饅頭と呼ばれているんだね」

二人は現場の監督さんのお礼を言って、青龍祭の本祭が行なわれる、運動公園に急いだ。運動公園に着いた。公園の入り口に、昔懐かしい、露店が並び、淡い電燈の提灯が吊るされ、その下を、村の人々がそぞろ歩きを楽しんでいた。

グランドに入ると、大きい青色の、二頭の龍が並んで、木で組んだ台座の上に置かれていた。その周りを見物の人が龍をバックに写真撮影をしていた。

二頭の龍には、数メートル間隔で、竹の棒がつけられており、担ぎあげられるように工夫されていた。

「わあ～大きな龍だこと。今まで見たこともない」「すごい、迫力。奇祭だ」

「こんな、お祭りがあるなんて、驚いた」

「見に来られている方は、ほとんど村人です」「村の伝統行事なんです」

「この龍は大きな竹籠の上に、萱を束ねて、正月から準備をして、作るの」

「へえ～もっと、多くの人に見せれば、貴重な観光資源になると思うよ」

「素朴で、繊細で、そして、豪快。すごく面白い」

グランドの外れに、舞台が設置されており、主催者の挨拶が始まり、やがて踊り、歌等が演じられ、青龍太鼓に移っていった。

二頭の龍が担ぎ手の肩に乗り、大きく回遊する。20メートルをこえる巨大な二頭の龍が飛ぶ様は、豪快さを超えた、感動を与える、まるで幽玄の世界だ。

「すごい！　こんなお祭りは他にないのではないか。感動だ」

青龍太鼓の豪快な、連打が続き、二頭の龍に火がつけられた。

パチパチと竹を弾く音をあげながら、あっという間に火は回り、炎は高く、高く、勢いを増し、辺り赤い色に染めあげる。谷間のグランドを赤々と照らしながら、人々の願い、祈りを乗せて、龍が天に昇ってゆく。花火が打ち上げられた。

ふたりはそっと手を合わせた。

清太郎は「この人と一緒にパリにいけますように・・・」と祈った。

そして、運命的な絆を感じていた。

絹子「清太郎さんといいお付き合いが出来ますように・・・」

絹子も心が震えるような、運命を感じていた。

青龍祭の夜、二人の顔を赤い炎が照らしていた。

(つづく)

翌朝 電話がなった。「はい、熊坂でございます。」 「もし、もし、絹子さんですか。南です。」 「昨日は有難う。とても楽しかった、とても印象に残った」 「龍の舞い、火をつけられて、天に昇ってゆく姿、すごい、こんなお祭りが有るんだね。本当に驚いた」 「ところで、絹子さん。ビックニュースだ」 「はい、ほほほ、何でしょうか？」 「さっき、入ってきたばかりの情報だけど、絹さんがデザインした作品が、東京コレクションに入選した」「すごい事だよ。本当に」「パリコレに道が開かれた。おめでとう」 「え、え～、え、本当ですか・・・」「信じられない。夢みたい」 「本当だよ、そのうち、新聞記者が取材に押しかけると思うよ、うわっはっは」 「とにかく、おめでとう。なるべく早く、打ち合わせに、東京に来て下さい。」 「絹子先生！」 「先生なんて・・・やめて下さい・・・」

「何とも、めでたい、よかった、よかった。待っていますよ」
 数日後、絹子は清太郎に会いに東京、表参道に向かった。 小田急線本厚木駅から千代田線「表参道」までは直通のロマンスカーがあった。朝6時28分、ちょっと早い、7時17分には表参道に着く。清太郎に会う前に妹の絹江と久しぶりに会う約束をした。
 青山通りを歩く、早朝の青山は人通りも少なく、閑散としていた。絹子のスラッとした、細身に、自身でデザインした、薄紫色の地に花柄模様をほどこした、ワンピースが清楚の香が漂うようであった。道ゆく人が振り返るような華やかさがあった。

二本目の角に待ち合わせの、喫茶店があった。ガラス越しに、手を挙げる、絹江の姿が見えた。絹子も微笑んで、軽く手をあげた。
 ドアを開け、窓際の絹江の席についた。
 「久しぶりねえ、元気だった。」 「大学の勉強はうまくいっている？」
 「あ、は、は、お姉ちゃんは相変わらずね」 「だんだん、お母さんに似てきたわねえ～」 「まあ～ご挨拶ね」
 「ところで、お姉ちゃん。こんなに早く、どこに、いくの？」
 「実はねえ、私のデザインした作品が、東京コレクションに入選したの。それで、南さんに呼ばれたの」
 「お姉ちゃん。本当。すごいわ！」 「お姉ちゃんの作る服は、どこか、人と変わっていると思っていたが、まさか、入選するとは！」
 「驚き・・・」 「絹江ちゃんの言い方は、誉められているのか、どうか、解からないなあ・・・」 「やあ、だ～当然、誉めているのよ。ふふふ」
 「そう、とっておきましょう」
 「それで、お姉ちゃん、これから、どうするの？」
 「うん～ 私も、突然の事で、少し、不安なの・・・」
 「大丈夫よ、お姉ちゃんなら、きつとうまくいくわ」
 「いいな、お姉ちゃん。チャンスよ。当たってくださいよ」
 「絹江ちゃんて、のん気で、いいわ・・・」
 久しぶりの姉妹の会話は、楽しそうに、時間一杯、続いた。
 「あれ、こんな時間、そろそろ行かなければ、出ましょう」
 「南さんの会社まで、一緒に歩いていきましょう」
 二人は並んで、並木路を歩いていった。南の会社の近くまで来ると、並木を背景にして、外国か

ら出店している、ある有名ショップの写真を撮っている、人に出会った。
(つづく)